

ナラティヴとしてのよそおい —他者と場所の対話的關係性の検討—

木戸彩恵

0. はじめに

この論文の目的は、よそおいの研究にナラティヴの視点を導入することの有効性を検討することにある。「よそおい」をナラティヴとして捉えることにより、さまざまな社会的文脈に身をおきながら日常生活を繰り広げる存在である個人が、(広義の)他者の存在によって、自己の在り方を決定づけ、認識と行為を変容させる様について検討したい。具体的にいえば、家に居るときの自己のポジションと外出するときのポジションは異なったものとなる。これは、行為者が過去経験における日常的な文脈の中で、他者との対話を通して、ある社会・文化に固有の様式として行為を形成し、ルーティン化・習慣化したポジションに従っていることに他ならないだろう。日常的な文脈において、個人は複数の場に身を置きながら生活を営む存在であり、それぞれの場所で自己のポジションを使い分けながら行為をしている。

なかでも、化粧をはじめとするよそおいに関連する行為は、個人が意識しない自己のポジションの使い分けを可視化している。よそおいは、単に外見を変化させるだけの行為ではなく自己の内面をも変化させ、それによって、社会的役割をも変化させるという円環的構造をもつ。

1. よそおいと宛先

さて、このような円環的構造には、バフチンの対話概念における宛先 (Bakhtin, 1988) の問題が密接にかかわっている。ある行為を実行する際に、人は他者を志向しながら行為する。そこでは、自己と他者の対話が繰り広げられることとなる。バフチン (1998) によれば、対話とは「つねに二つの意識、二つの主体のはざまで生じる」ものであり、二つの主体の対話とは、性の意味を表す輪郭 (自己テキスト) を持つ者同士のあいだの対話であり、輪郭 (自己テキスト) を互いに交換することである (五十嵐, 2008)。

さらに対話という観点から捉えると、その相互作用が重要になってくる。個人が環境との間で繰り広げる有機的な相互作用を捉えるための方法としては、ナラティヴ・アプローチが相応しい。ナラティヴとは「広義のことばによって語る行為と語られたもの (やまだ, 2008)」である。ナラティヴ

1 本研究では、「よそおい」を「装い」と「粧い」の両義性をもつ言葉として使用している。

は、視覚的・文化的表現をその範疇に含む。すなわちよそおう行為もナラティブなのである。よそおう行為自体は、私的な行為だが、よそおった結果（としての表出）は、公的な行為となる。よそおう行為を「広義のことば（＝ナラティブ）」として取り扱うことは、特定の文脈において要請される個人の在り方を理解することである。人は、文脈の中に生きる存在であり、他者との関係性においては常によそおいが生じる。対話概念をもとに関係性の調整及び他者との視点の交換という問題を取り扱うことは、1) 状況に応じた「ことば」の使い分けのように、よそおう行為のみならず、人の行為のあらゆる側面に応用できる可能性を秘めており、さらに、2) 従来の対自―対他研究の枠組みを超えることを可能にする。たとえば、対自―対他の枠組みにおける化粧の議論として Cash, Dawson, Davis, Bowen & Galmbeck(1989) は、女性の身体的魅力と化粧の関連を検討しており、Rudd(1999) は、女子大学生のボディイメージと化粧を含む容貌印象管理行動の関わりを検討している。Mack & Rainey(1990)の研究によっても、化粧を含む外見の手入れを入念にしている外見魅力の高い人の方が採用されやすいことが報告されている。これらの研究はいずれもが、よそおった結果としての、化粧をしている対象を見る他者の視点に立った研究である。また、大坊(2004)は自己・他者両面からのアプローチを試みているものの、その相互作用については論じられていない。ナラティブの視点による相互作用の導入は、従来の心理学における自己と他者の静的な関係性のパラダイムの組み直しとして位置づけることができる。

したがって、よそおいをナラティブとしてとらえることは、客観的な「行動」として扱い、限定的な対象と効用を対象とした統合的な理論と予測可能な法則を追求してきたこれまでの心理学におけるよそおい研究からの脱却を意味する。そして、個人の生き方に深く影響する「行為における意味(meaning in action: Sugiman et al., 2007)」の議論を可能にする。

I-1. 宛先となる他者

宛先とよそおいについて、木戸（2009）は、特に化粧行為を取り扱う研究の文脈から「仮定された他者」という概念を用いて説明を試みた。具体的には、次のように記している。

「外見を変容させ、変容させた外見によって内面が変化するという化粧の持つ特殊な構造にも、この「仮定された他者」は大きな役割を果たすだろう。「仮定された他者」が、社会文化的に形成されるという観点に立てば、仮定された他者は、女性にとってのマスター・ナラティブとなっており、「仮定された他者」と対峙する自己をつくり上げるために化粧を施すともいえる」

（木戸，2009 より引用）

宛先について、筆者は当初個人と他者の相互作用を中心にすえた「個人モデル」を想定していた。具体的には、人が対峙する『他者』には、「具体的他者」（個別具体的な存在である、「特定の他者」）と個人が属する文化内で匿名化された他者（歴史的に構築された自己内にある「自分自身を見ている仮定された他者」）である「仮定された他者」の、2つのレベルの他者が存在すると考えた。この時点では、「具体的他者」は個別具体的な存在であると同時に、固定された役割をもつことを前提としていた。一方で、「仮定された他者」について、「職場や学校に居る人たち」や

「レストランに食事に行った時に居る人たち」のようなある状況における他者を想定していた。

さて、この時点においては、よそおう行為がこれまでの人生の経緯から形成された「仮定された他者」から見られる自分自身を見ている自分という入れ子構造が、自己内に展開されることによって成立するとした。さらに、実際に化粧や被服などによって「よそおう」ことで、外部から見られる自己＝仮説的外界における自己となる。そうすることで、他者に対峙する際の自己として、社会文化的状況に応じた新たな自己像を形成すると考えていた。このように、「仮定された他者」が、社会文化的に形成されるという観点に立てば、仮定された他者は女性にとっての支配的言説となっており、個人は「仮定された他者」と対峙する自己をつくり上げるためによそおうともいえるだろう。

I-2・宛先となる場所

しかしながら、よそおう行為の持つ意味は、個人としての「他者」や「自己」のみで決定するわけではない。生活実践における場の文脈の中で個人が求められる役割のなかで、その相対的な位置づけに応じながらよそおう行為は対話的に変容する。

具体的な例として、木戸（2008）で実施したインタビュー調査²の調査協力者は、他者と場所とよそおいの関係について、就業時と恋人と過ごす時間を次のように語っている（Table. 1）。

Table. 1 調査協力者 B さんの語り

I: B さん自身の好きなメイクっていうのはどんなメイクなの？
マオ: どれも、どっちも好きです。基本はそっち（仕事）の大人っぽい側をすることが多いですね。今でも。
(中略)
I: たとえば、デートする時とかでも、あまりその、かわいらしい感じのメイクはしないの？
マオ: しますよ。相手の好みなので。
I: 彼氏は、かわいらしいメイクの方が好きなの？
マオ: かわいらしいほうが好きです。可愛いっていうか、ナチュラルな方が好きですね。
I: 仕事の時とは変わる？
マオ: 省くだけです。アイシャドウ塗らなかつたりとか、マスカラとチークだけだったりとか。
I: それも、彼の好みっていうのも聞いた？
マオ: 行く場所にも、一緒にレストランに食べに行くとしたら、ハイライトとか入れたりとか、ちょっとマスカラ重ねてつけてみたりとかはしますけど、車で近くに遊びに行くとかだったら、もうそれぐらいで、ナチュラルな感じで。

² インタビュー調査は、2007 年に 4 名の美容職従事者を対象に実施した。内容は、化粧行為を中心とするよそおい行為についての質問に回答を求めた。本文中には、対象者 1 名の語りの一部を抜粋し、使用している。提示したインタビューの語りにおいて“**I**”はインタビュアーである研究者を、“**マオ**”は調査協力者を示している。

マオさんは、インタビュー実施当時 23 歳。美容専門学校のメイクアップコースを卒業後、美容室にて勤務という経歴の持ち主である。なお、サロンのスチール撮影などでは、メイクアップを担当していた。

調査協力者であるマオさんは、就業時には年齢よりも年上に見られるようなよそおいを心がけて行っているが、恋人と居る場合は、ナチュラルで可愛い印象のよそおいを心がけていると語っていた。また、恋人と同席する場に応じて、よそおいを調節していた。親密な関係性をもつ恋人との関係において、自室で過ごす場合には、「恋人が居ても化粧はしない」と語っており、また、車で近くに遊びに行く場合にはナチュラルな化粧、レストランに行く場合には、通常行う化粧にプラスして、ハイライト³やマスカラを重ねづけするなどしていた。

マオさんの事例は、よそおう行為の宛先が「恋人」ではなく、「恋人と共に過ごす場所」に向けられていることを示している。つまり、「親密で閉じられた場に居る恋人」と「近所に居る恋人」と「公的な場に居る恋人」に対してよそおう行為は、マオさんの中で分化している⁴。

理論的には、やまだ・山田（2006）は、「人間は『個人』で定義されず、『場所（トポス）』のなかで定義されると考えれば、たとえ同じ人間であっても、どここの場所に居るかによって対話の構造が根本的に異なるのである」と指摘している。社会文化的文脈に身を投じながら日常生活を繰り広げる個人にとって、重要となるのは「他者」であると同時に行為の宛先となる「場所」なのである。他者の文脈や場所自体が個人の対話の構造を変容させる。つまり、人や関係性を包含しつつ日常生活の文脈において多重に重なった「場所モデル」として、よそおう行為の対話的構造をとらえることが新たな研究の展開可能性として示されているといえる。場所の中に位置づけた他者を宛先をとらえること、そして、自己をも場所の中に位置づけ、動的な活動をする主体として、その行為と関係性の変容をつぶさに読み解くことは、研究における主体性をもつ個人の能動性—身体性の復権—にもつながるだろう。

Ⅱ. よそおいのスイッチング機能

ここまでの論考において筆者が主張してきたように、よそおう行為はよそおうことにより心理変容が起きるという単純な因果関係として捉えられるものではない。むしろ、日常生活の文脈で実践されるよそおう行為は、「場所—場所」間の心理・身体的移行を円滑に媒介し、スイッチングする手段として機能すると考えることが妥当であろう。

よそおう際に、個人はそのポジションにおいて期待される相対的な位置づけに向けてよそおう

³ ハイライトとは、顔の立体感を演出するために用いるメイクアップのための化粧品を指す。顔のなかで高く見せたい部分や、明るく見せたい部分に、明るい色のパウダーを塗布するのが通例である。

⁴ このような語りがマオさんの事例において展開された理由として、インタビューの時点で既に恋人との関係性が十分に構築されている段階にあったことも一因であると考えられる。親密な関係性を築く初期段階では、当然ながら、相手の他者性は強く、よそおう行為の宛先は多くの場合、個別具体的な他者となる。

親密な関係性の構築は、よそおう行為の宛先の在り方の問題にとって意義深い議論をもたらすだろう。だが、具体的考察については後の研究に委ねたい。

のであり、他者が目にするのは、ある文脈に相応しく見られることを前提にして装った個人である。このような前提に立つとよそおう場合に、よそおうとするその瞬間、個人にとっての宛先は既に決定していると考えられる。心理学的研究においては、これまで、よそおうことによって、心理変容が起こると考えられてきた。しかし、よそおうとする正にその瞬間に、個人は、時間展望と未来におこなうだろう行為に対する見通しをある程度もっており、その限定された範囲に馴染む自己に向かいよそおうのである。

したがって、個人は、よそおう行為を開始したその時点において、すでに未来のある宛先へと向かう自己を作り出しており、よそおう行為自体が心理変容を促す。個人は他者の目をとおして自己をよそおい、次の場に移行するための—社会・文化的ポジションに移行するための—自己をつくりあげるのである。

Ⅲ. 日常における生活の場の文脈

日常生活における実際の社会文化的ポジショニングについて考えてみると、個人は多重の場所に生活する行為主体であり、なおかつ、定常的に同じ時空に存在することは不可能である。通常、一人の人間はいくつかの場所を往還しながら生活していると考えることが妥当だろう。

日常生活における場所の往還は、個人の生活実践によりそれぞれに異なると考えられるが、ごく単純にモデル化を試みとするならば、およそ次のようなモデルを作成することができる (Fig. 1)。

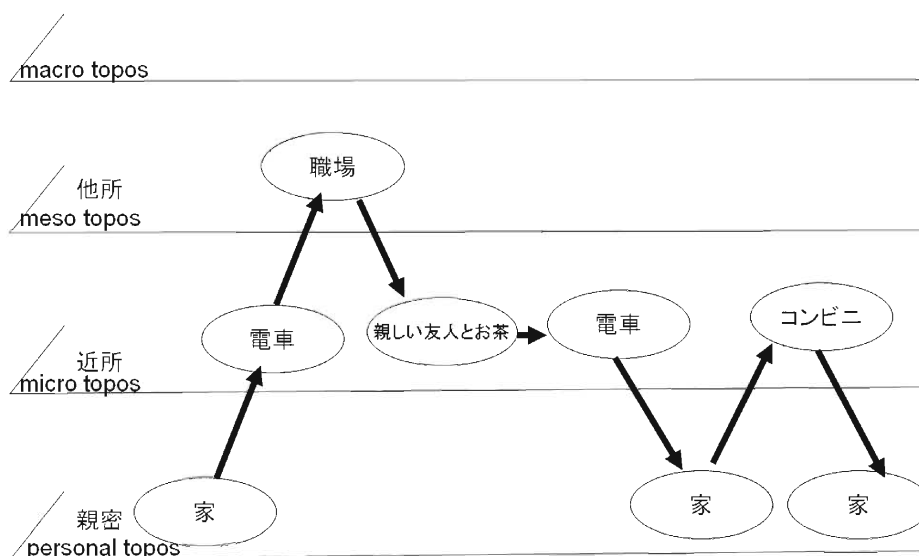


Fig.1 場所移動の例(レイヤーモデル)

Fig. 1 は、心理社会的距離を基準とした場所の多重構造を直線化し、レイヤー（階層）モデル⁵に変換したものである。

この例から個人が辿るだろう軌跡をなぞることができる。パーソナル・トポスである家からメソ・トポスである職場に出向く際に、職場に相応しいと考えられるよそおいを実践する（この場合に、電車は中継地点となる）。仕事後には、化粧直しを行うことによって、よそおいのコードを調整し、ミクロ・トポスである親しい友人と喫茶店にお茶をしに行く、そして、再び電車でパーソナル・トポスである家に帰りコンビニに行き、家に帰るという一連の場所移行を想定することが可能である。ここで、個人は家で居る時、職場に居る時、親しい友人と居る時など、それぞれ別の文脈に身をおくことになる。また、家―電車―職場という場所移行の一連の流れにおいては、電車は中継点であり、家―職場が宛先となる。電車は移動の手段として定義づけることができる。しかし、電車内での時空のすごし方については、その定義は曖昧である。そのため、個人の化粧の宛先は、電車という時空を越えて職場に向かい、家を出るときに施す化粧は職場向けの化粧となるのである。

IV. よそおいの宛先と自己のポジショニング

このような文脈は社会文化的文脈のなかで無限に存在しており、場所の文脈は個人に特定の役割をもたせる。個人は全ての文脈において各々のポジションに合わせた、よそおう行為を要請される。

生活実践において移行する個人の宛先とポジショニングの問題に密接にかかわる理論として、また、ナラティブ論と親和性の高い理論として、Hermans & Kempen (1993) によって提唱された対話的自己論 (The Dialogical self theory) がある。対話的自己論において、自己は固定された統一的な思考過程をもつ存在ではなく、分権化された存在としてとらえられている。すなわち、個人は複数の自己のポジション⁶ (I-position) をもち、登場人物としての me それぞれについて、ストーリーを語る著者のように機能する。具体的には、「I as something」の表現形式において、職業やある特徴をもつ「私」を限定して表現するように自己が形成されているという考えである（溝上，2008）。なお、対話的自己論では自己である I が複数のポジション間を移動しつつ、さまざまなポジションを取って各ポジションのもつ me を語りつないでいく。

対話的自己理論は、自己と対話という2つの概念によって成立している。

Hermans & Dimaggio (2004) によれば、自己概念は、ジェームスの概念に基づいている。ジェームスの自己概念は、後にミードらの理論化により、自己心理学へと展開されているが、この概念のなかで他者は単に「外部」として存在するものではない。他者は自己に組み込まれ、自己は他

⁵ この区分は、やまだら (2006) の「ライフストーリーの樹」モデルに準じる。社会・文化的関係性の近さを基準とし、個人的な場所 (Personal topos) から、より社会・文化的広がりもつ場所 (Meso topos) へのグラデーションとして理解されたい。

⁶ 溝上 (2008) によれば、ポジション (position) は、あるモノ（他にも事象、人など）の他のモノに対する相対的位置の意味であるため、ポジションはそれ自体では決めることができず、他との相対関係においてしか決められないとされている。

者との関係性で調整される。その結果、自己は関係性の世界に陥ることになるのである。

また、対話は、バフチンのコミュニケーションと交換（交流）のための人間の能力を指す。対話的は声と結びついているとされる。ここでの声は、「音声的概念としての声とは異なるもので、声はただ音に出すという行動ではなく、見方や考えていること、立場を示す(Wertsh, 1993)ものである。内部の想像上のポジションは声を授けられ、物語の形を帯び、それぞれの声は自身の物語となり、内部の声の複数性となる(Hermans & Kempen, 1993)」ものをさす。声の中でも、とりわけ、多声(poliphonic dialogicity)の概念が強調されている。多声とは、想像上の声を含めて多数の声によって関係が構成される状態をさす。想像し、あるいはまねることこそが他者の視点を獲得することにつながる。そしてさらに、ポジションを得ること自体が対話の形式も変容させていくこととなる。

これまでにみてきたように、「宛先」の発達は個人の関係性の相互作用の発達過程として考えることができる。さらに、繰り返しになるが、人は日常生活において複数の場を移行し、場の移行に伴い自己のポジションを自在に変容させる存在である。場所から場所へ移行する際に、人は自己を修正し、その場所に相応しい自己をよそおおうと試みる。特に、調査や日常場面では「TP0にに合わせて化粧をする」といった語りが女性から頻繁に発せられる。TP0という表現は、よそおいに纏わる研究によく用いられる言葉であり、「TP0に合わせた化粧」というフレーズなどは、すでに支配的言説としてその地位を確立しているといえるほど一般的である。しかし、実際に個人にとって重要になるのは、場合(occasion)ではなくむしろ役割(role)を先取りすることである。

よそおう行為の研究文脈に対話的自己の概念を取り入れることは、日常生活において(社会・文化的影響や他者との関係性の持ちかたの総和として)展開される、このような自己—他者—場所の3項関係における対話のダイナミズムを捉えることを可能にするだろう。

V. まとめと展望

本稿では、よそおう行為の宛先を、他者と場の文脈という2つの観点から捉える可能性について吟味した。「宛先」について筆者ははじめ、行為者と他者の相互作用を中心にすえた「個人モデル」を想定していた。しかしながら、ナラティブの視点を取り入れ、よそおいのダイナミクスを捉えることにより、「個人モデル」としての行為者と他者の枠組みが崩れた。そのため、場所モデルの導入を検討した。その上で、流動的な日常生活における自己—他者間の「構え」の形成と移ろいゆく他者との関係の調整について、実際の調査協力者であるマオさんの語りを引用しつつ検討を試み、従来のよそおう行為の結果としての自己変容という捉え方から、行為そのものが自己変容をひきおこす過程であるという捉え方へとパラダイムを変換させた。そして最後に、Hermans & Kempen (1993)の対話的自己論の援用を試み、日常生活における複数のポジション間をつなぐためのスイッチングの手段としてのよそおう行為の有用性について考えた。

ナラティブの視点の取り入れは、よそおう行為のダイナミクスが個人の生き方に関わりつつ、持続的に受容されている意味を捉え、なおかつ、個人とよそおう行為の関わり方についての、社

会・文化的影響について明らかにすることを可能にする。また、生活実践としての文脈とともに生きる個人の行為をつぶさに記述することは、よそおい以外にも応用可能な、自己―他者間の関係性の中での個人の在り方とその発達の過程をとらえることを可能にするだろう。今後、研究の成果からよそおう行為を有効な心理的サポートの一つとして確立すること、教育の現場に活かす可能性が開かれることを望む。

引用文献

- Bakhtin, M. (1988). ことば 対話 テキスト (ミハイル・バフチン著作集 8) (新谷 敬三郎・佐々木 寛・伊東 一郎, 訳). 東京:新時代社. (Bakhtin, M. (1979). Вопросы литературы и эстетики.)
- Cash, T., Dawson, K., Davis, P., Bowen, M & Galmbeck, C. (1989). Effects of cosmetics use on the Physical Attractiveness and Body image of American College Women. *The Journal of Social Psychology*, 129, 349-355.
- 大坊郁夫. (2004). 粧うことと癒すこと. 心の科学, 117, 73-78, 日本評論社.
- Hermans, H. J. M. & Kempen, H. J. G. (1993). The dialogical self: Meaning as movement. San Diego, California: Academic Press. (溝上慎一・水間玲子・森岡正芳, 訳 (2006). 対話的自己——デカルト／ジェームズ／ミードを超えて). 東京:新曜社.
- Hermans, H. J. M. (2003). The construction and reconstruction of a dialogical self. *Journal of Constructivist Psychology*. 16, 89-130.
- Hermans, H. J. M. & Dimmigi, G. (2004). The Dialogical Self In Psychotherapy. New York: Brunner- Routledge.
- 五十嵐茂. (2008). バフチンの対話理論と編集の思想. *質的心理学研究*, 7, 78-95, 東京:新曜社.
- 木戸彩恵. (2006). 異なる文化的状況に属する青年期日本人女子学生の化粧行動——日本とアメリカでのインタビュー調査の質的分析——. 立命館大学修士論文 (未公開).
- 木戸彩恵. (2008). 化粧による心理変容のナラティブ分析——装う自己と見られる自己——. 京都大学修士論文 (未公開).
- 木戸彩恵. (2009). 化粧行為にみられる自己——他者間の対話的關係性への考察. *京都大学教育学研究科紀要*, 55, 365 -375.
- Mack, D. & Rainey, D. (1990). Female applicants' grooming and personnel selection. *Journal of Social Behavior and Personality*, 5, 399-407.
- 溝上慎一. (2008). 自己形成の心理学——他者の森をかけ抜けて自己になる. 京都:世界思想社.
- Rudd, N. A. (1999). Cosmetics consumption and use among women: Ritualized activities that construct and transform the self. *Journal of ritual studies*, 11, 59-77.
- Sugiman, T., Gergen, K., Wagner, W., & Yamada, Y. (2008). *Meaning in Action: Constructions, Narratives, and Representations*, Springer.
- やまだようこ. (2007). 質的研究における対話的モデル構成法——多重の現実, ナラティブ・テキスト, 対話的省察性. *質的心理学研究*, 6, 174-194, 東京:新曜社.
- やまだようこ・山田千積. (2006). 看護学において「生活者」の「生活」を描くための研究方法「ライフストーリーの樹」モデル——専門家と生活者の場所と糖尿病のナラティブ. *看護研究*, 39, 51-63.
- Wertsch, J. V. (1993). *Voices of the Mind: Sociocultural Approach to Mediated Action*. Harvard University Press.

謝辞

本稿の執筆に際しまして、有益なアドバイスを下さった査読者の先生方、ならびに、丁寧なご指導をくださった京都大学教育学研究科やまだようこ教授に感謝申し上げます。

(教育方法学講座 博士後期課程 2 回生)

(受稿2009年9月7日、改稿2009年11月30日、受理2009年12月11日)

The Dressing Act as Narrative:
The Examination of Dialogical Relationship of the Other and the Topos

KIDO Ayae

The aim of this paper is to review the research of the act of dressing and to find the possibility of future research. First, I reviewed previous researches in the past review of psychological study. Second, I discussed the “addressee” in the context of the act and the place. After that, I pointed out the possibility of the notion of the Dialogical Self Theory (Hermans & Kempen, 1993). By using this we could see the relationship in the context of the act and the place after for a dressing act. From this position, the dynamics of the act to be dressed affects the person’s way of life, I arrest a meaning received persistently and can still clarify it about the influence of mind / the culture about the relations of the act to be dressed by a person.